

# 最後のマルクス

——今村仁司『入門』を読む——

熊野純彦

## はじめに

今村仁司は、一書にまとめられたものとしては最後のマルクス論を、つぎのように書きはじめている。引用しておく。

いまマルクスは忘れられたひとである。しかしマルクスは忘れてはならないひとである。  
なぜマルクスは忘れられたのか。なぜマルクスを忘れてはならないのか。

(『マルクス入門』p.7)

著者は、2007年の5月5日に帰らぬひととなった。ちくま新書から上梓された『マルクス入門』の奥付には「2005年5月10日 第一刷発行」とあるから、今村にはなお2年の時が残されていたことになる。じっさい、遺著となった『社会性の哲学』(岩波書店)、没後に刊行された訳書・ソレル『暴力論』(岩波文庫、塚原史との共訳)をはじめとして、『マルクス入門』刊行後にも、今村の仕事は数多く世に出ているのだから、この一書を今村仁司の「最後の仕事」と呼ぶわけにはいかないことはたしかである。にもかかわらず、うえに引いた「まえがき」の書き出しに、この不世出の思想史家の、遺言めいた響きを聴きとってしまうのは、筆者ばかりではないだろう。

マルクスはたしかに忘れられつつある思想家である。マルクスは、だがたほう確実に、忘れてはならない思想家でもある。引用した部分につづけて今村自身が書いているように、今世紀の歴史的経験それ自体が、マルクスが忘却される原因となったことは否みがたい。今村がまたそうも書いているとおり、マルクスの名を忘却するのを禁じているのは、マルクスこそが、私たちが今日もなおそのうちで生きている、資本制経済の理論を形成した思想家であるからである (p.9)。この稿では、今村の最後のマルクス論を読みながら、その間の消息について考え、今村マルクス論のポテンシャルを測定しておきたい。

## 1. マルクス像とその諸類型

今村仁司『マルクス入門』は、「序章 さまざまなマルクス像」において、これまで多様なかたちで提出されてきたマルクス解釈の類型を整理している。今村によれば、「マルクスは解釈された種々のイメージを帯びていまなお思想と文化の領域を「幽霊のように」徘徊している」。だからこそ、マルクスを読もうとするとき、「百五十年の解釈史を無視して読むわけにはいかない」。マルクスの「著作と思想」そのものが「歴史のなかで解釈された歴史的産物である」からだ (p.16)。「人間が歴史内存在である以上は、精神のひとつの営みとしての「読む行為」もまた歴史内存在なのである」(p.18)。

150年におよぶマルクス解釈の流れを、今村は三つの類型にまとめている。第一類型は「経済中心史観」であり、第二類型は「実践的主体論」であって、第三類型が「構造論（関係論）」にほかならない。今村そのひとは世界的な視野のもとで類型を構成しているけれども、この国のマルクス解釈の歴史にそくしていえば、第一のものがいわゆる「正統派」の解釈、第二のそれがいわゆる「疎外論」的理解に相当するのを見てとることはたやすい。第三類型として今村の念頭にあるものは、今村自身の学的探究の出発点でもあったアルチュセールのマルクス解釈であるけれども、今村が註記しているように (p.60)、廣松渉の「物象化論」的マルクス理解も、そのうちに数えあげておくことができるであろう。

第二類型についても、それが登場するにいたった歴史的な脈絡をめぐっては、じゅうぶんな理解と共感を示しているとはいえ、著者のマルクス理解がなによりもまず第三類型を踏まえたものであることは、まちがいが無い。第一類型がいわゆるロシア・マルクス主義の立場に代表されるかぎりでは、「経済中心史観」をめぐるこの書の認定は、とうぜん手厳しいものとなる。ここでは、しかしまず、今村のつぎのような発言に注目しておきたい。経済中心史観が支配的となるにいたる、そのこと这个消息を説く部分からの引用である。過去の思想を読みとくうえで、今村の公平な視線が感じとられる一節であろう。

二つの驚きがあった——一方に技術の多様な発明による社会の「進歩」への肯定的な驚きがあり、他方に、和解不可能にみえるほどの深い（憎悪をとまなう）社会の分裂と階級闘争の現実に対する恐怖をとまなう驚きがある。二つの相反する方向をもつ驚きの背景には、新興資本主義経済とそれを担う中産階級の行動と思想が現存社会の細部にいたるまで、要するに日常生活のこまごまとしたものから国家にいたるまでの全範囲にわたって、巨大な影響力をもつにいたったという事実がある。すべてが経済によって支配されているという印象が人々の心の奥底まで浸透したのである。(p.26) (原文のゴチックを下線に変更。以下、同様)

あらゆる思考のはじまりには一箇の驚きがある。現実それ自体に対する驚きがある。その驚きが正当なものであるかぎりでは、いっさいの思考のいとなみには、それぞれ固有の歴史的意義があり、現在の意味もまた存在する。この国ではいわゆる「正統派」の一翼をかたちづくったマルクス解釈であっても、その原型については例外ではない。問題はただ、正統派が解釈権をいわば制度的に独占してきたことだけである。

ちなみに第三類型、とりわけアルチュセールのマルクス解釈から今村が学び、本書でもその影響が継続している論点のひとつは、歴史の概念であり、また歴史の時間の概念にほかならない (p.51f.)。この点については、のちにまた触れることになるだろう。

## 2. 「ギリシア人」マルクス、「ヘーゲリアン」マルクス

マルクスを読みなおすさいに、今村仁司はいくつかの補助線を引き、解釈図式を設定している。解釈史上からみても問題提起的な論点のひとつは、マルクスのうちにギリシアへの憧憬をみとめようとする、今村の理解である (第 1 章)。印象的な一節を引く。

一見ささやかな事実が一人の思想家の心の奥にある思想体質を、決定するとはいわないまでも、方向づけることはおおいにありうることだ。ここで注目したいことは、マルクスがドイツ的思想家であると同時に、古代ギリシアを精神的故郷としてもつ思想家であったという「小さい事実」である。この事実をさして「ギリシア人」マルクスとよぶ。(p.62)

マルクスは 19 世紀前半という時代に、思想的／学問的な自己形成期をむかえている。ほぼ一世紀におよぶ、ドイツにおける古代ギリシア熱が、いまだ冷めやらぬ季節である。今村の見るところでは、そして、「マルクスもまた古代フィーバーを先輩たちと共有していた。彼は先輩思想家と同様に、つい最近のフランス革命に熱狂すると同時に、思いを古代ギリシアにもはせていたのである」(p.63)。——重要な「先輩」のひとり、いうまでもなくヘーゲルそのひとである。「ギリシア人」マルクスを強調する今村の理解は、同時に、これまでの幾多のヘーゲル／マルクス論にもまして、マルクスのうちにひとりの正統的なヘーゲリアンのすがたをみとめるものであった (とくに第 4 章を参照)。それは、「唯物論」あるいは「唯物史観」ということばに、主要にはまず論争的な意味をみとめる今村の認定とむすびあう。

今村が「ギリシア人」マルクスを問題とするとき、論点のひとつは、マルクスにおける「未来の政治的共同体 (コミュニオン)」(p.67) のイメージにかかわる。「各人の自由な発展が、すべての人々の自由な発展にとっての条件である」ような共同体 (『コミュニスト宣言』第二章)、「自由人たちの団体」(『資本論』第一巻)、「必然性の国のかなたで」開始される「真の

自由の国」(同、第三卷)、これらすべての、来たるべき共同体のイメージをつらぬいているのは、今村によれば「マルクスのギリシア精神」なのである (p.68)。

もうひとつ重要な論点がある。今村は、『資本論』へといたるマルクスの思考のみちゆきのうちに、「商業と貨幣に対するギリシア的批判」のモチーフをみとめている。マルクスがシェイクスピアを引用しながら、貨幣批判を展開する一節を引いて、今村はいう。

貨幣とは物の本来の秩序を覆し「倒錯」させるという断定と、貨幣は万人に身をまかせる娼婦だという審判は、理論的判断である前に、ひとつの倫理的な態度決定である。マルクスの言葉を少し変更するなら、それらの文章はそのまま古代ギリシア人、たとえばプラトンやアリストテレスの言葉ともなるだろう。貨幣は、永遠的コスモスの秩序を攪乱する異常なものであり、人格はもとより知識や知恵という価格にのらないものを価格つきのもの、つまり売りに物に変えてしまう、という批判は文字通り古代ギリシア的であり、いやむしろもっと古くからある贈与心性から発するものだといえるし、事実そうである。(p.74)

今村は、プラトン、アリストテレスのソフィスト批判のうちに、問題の原型をみる。「前五世紀のアテナイ社会は転換期にあり、古来の伝統的な贈与体制を守るのか、貨幣経済になだれこむのかの境目にあった。ソクラテス派とソフィストとの論戦は、古代社会の危機を反映している」(p.76)。——その早すぎた晩年に近づくにつれ、しだいにギリシア思想への関心を深めていったと仄聞する著者による、近年のギリシア研究の成果を踏まえた認定であり、これはそれ自体としても一箇の卓見であるといわなければならないことだろう。マルクスの貨幣批判のうちにギリシア的思考の残響を正確に聴きとることは、この思想史家によるのみ可能なところみでもあったはずである。

ことをマルクスに直結させるその手ぎわに、あるいは異論の余地はあるだろう。とはいえ、今村の視点が以後の研究課題へとつながる重要な問題提起をふくむことについては疑いをいれない。ヘーゲルの、いわゆる「止揚」概念を再解釈し、そこにマルクスの歴史概念の理論的基底を見とどけようとする理解 (p.170ff)、一箇の正統的な「ヘーゲリアン」としてのマルクス像を強く提起する解釈ともならんで、マルクス理解のある部分に再考をうながす、今村晩年の思考にあって、その重要なモチーフのひとつであるように思われる。

### 3. 「ルソー主義者」、マルクス

今村仁司晩年のマルクス論は、ギリシアの思考を反復するマルクス、ヘーゲルの思考を内化するマルクスを強調する。これはそれ自身ひとつのポレミカルな問題提起にほかならない。マルクスの思想史的理解についていえば、とりわけ青年マルクスの思考におけるルソー的な

思考の動機を強調することも、今村マルクス論のもうひとつの特徴であったといつてよい。「分裂なき共同体」を論じる第2章に、論点は集中的にあらわれる。もっとも「分裂なき共同体」という理念に今村そのひとが懐疑的である以上 (p.128)、そのルソー評価、「ルソー主義者」マルクス評価も両義的であることに注意しておく必要がある。この間の消息については、のちにふれることになるだろう。

青年マルクスの課題のひとつを、今村はつぎのようにまとめている。「ユダヤ人問題によせて」を引用したのちに、マルクスにあっては「政治的民主主義」がすでに批判の対象となっていることを確認したうえで、今村は以下のように説く。

政治的国家と市民社会の分裂は、個人にとっても分裂をもたらす。それをフランス革命のいわゆる人権宣言の言葉でいえば、シトワイヤン (citoyen 公民) と オム (homme 私人) の分裂である。「ひと = 私人」とは何者か。それは市民社会の利己的人間であり、つまりはブルジョワ的人間である。ひとは、一方では政治社会のメンバーとしては公的人間(公民)であり、そのかぎりでのみ国家に所属する万人は等質的であり同等である。他方で、市民社会では、ひとは利己的個人として活動し、そのかぎりでは違いと対立を生き、ホッブズ的な「万人の万人に対する戦い」を生きざるをえない。(p.95f)

なかばは、マルクスにおけるルソー的な思考のモチーフを示している。なかばはまた、マルクスにとってルソー的な発想が超えられなければならなかった事情をも説く一節にほかならない。ルソーが思想的に先どりした「政治革命が生み出した政治国家は、まだ真実の類生活ではなくて、想像された共同体、またはひとが倒錯的におもいこむ幻想の共同体でしかない。これをさらに一歩進めて、真実の共同体、古代ギリシア的な分裂なき共同体をつくり出さなくてはならない」(p.96)。——古代ギリシアへの評価が、ここでもその影を落としている。ルソー評価については、問題はしかしさらにいくばくかは複雑である。「ルソーもまた古代ギリシアを精神の故郷とするひとであった」(p.98)からである。

今村のルソー理解を一瞥してみる。今村によれば、ルソーによる「社会契約」論は、つぎのような課題を設定している。ひとつは、共同体の成員の人格と財産を共同的に保護する結合形式を発見することであり、もうひとつには、しかしその半面、万人と一体となった各人が、「それにもかかわらず自分自身だけに服従し、以前と同じ程度に自由であり続ける結合形式を見つけること」にほかならない (p.97)。

ひとつの課題は、ホッブズやロックとも共通する、社会契約論一般の課題である。べつの半面の課題こそが、ルソーそのひとに帰属する思考の課題であるといわなければならない。「各人が自由を保持しながら、他のすべての個人と自由に結合できるのであれば、この共同体(ルソーの用語では Cité シテ)はまさに分裂なき共同体である。ルソーの論理を抽象化して

いえば、彼の共同体においては、各人の自由な発展が万人の自由な発展にとっての条件になる。これはまさに文字通りに『コミュニスト宣言』の言葉でもある」(p.98)。まさしく、「ルソー主義者」、マルクスなのである。——シトワイヤンがシテ（ポリス）をつくる。そうルソーが主張する。今村の認定によれば、それはなにより「ルソーは自分の実際の故郷であるジュネーヴをも古代ギリシア（とくにスパルタ）の共同体から眺めている、あるいは理想化している」(p.99) からにほかならない。今村の理解のなかで、「ギリシア人」ルソーと、「ギリシア人」マルクスが、交錯し、交響する。

今村仁司自身が注意しているように、マルクスの思考はむしろ、ルソーの構想にとどまることはない。マルクスにとってルソーの思考は「政治的抽象化」であり、ルソーのいう「自然に与えられたがままの」人間像はむしろ「利己的なブルジョワ（私人）」のそれにすぎない。「マルクスの批判的判断によれば、ルソーの構想では、この「私人」がそのまま温存されてしまい、共同体は分裂したままにとどまる」。問題は、ルソーの構想を継承しながら、なお私人の分裂状態を克服し、「分裂なき共同体」を実現することにある (p.100)。

分裂なき共同体とは、それではなにか。今村の認識を引く。『経済学・哲学草稿』の所論が検討されたうえで、「ギリシア人」マルクス、「ルソー主義者」マルクスという解釈の可能性が掛け金として賭けられている一節である。

人間主義と自然主義の統一、それが分裂なき共同体である。ここに古代ギリシア的共同体の理想が、マルクスの言葉で再定義されている。それは、たんなる古代の復元ではない。古代は古代に特有な内容をもっており、その特性は古代の消滅と一緒に消滅する。現代は、その特性を否定的な仕方で継承しているにすぎない。

しかし、その否定的特徴を廃棄し、古代から封建制を通して資本制社会まで残存してきた類存在（人類の共同存在）の阻止要因をことごとく破棄することが可能であるなら、古代的理想を体現する分裂なき共同体を実現する見込みがある、とマルクスは確信した。それを思想の言葉でいえば、引用文にあったように、人間と人間の障害物なき統合、人間と自然との人間的な統合であり、したがって自然主義と人間主義の統一が実現するのである。

人間の解放は自然の解放と同時に進むというというのがマルクスの生涯を通じての確信になるだろう。そしてこれこそが、まさに自由の共同体である。(p.119)

分裂なき共同体という理念について、今村自身がなほどこか懐疑的であることについては、さきにふれておいた。にもかかわらず、この一文には、若き日いらい変わることなく懐きつづけた、今村仁司自身の理想も反響しているかにも思われる。今日ではそれは、アソシエーション論的なマルクス理解とも響きあうものであるはずだ。現に存在し、すでに潰え去った歴史の実験とは、根底から異質な共同体の像がそこにある。

#### 4. 「歴史哲学者」、マルクス

成熟したマルクスは、一方では資本制生産様式をめぐる理論的分析を深めるとともに、資本制そのものを歴史の展望のうちに位置づける作業を遂行している。それは、今村仁司がそう説いているとおり、資本制社会のうちに先行するいっさいの共同体の痕跡をみとめる、いってみれば系譜学的なこころみであると同時に、歴史学的探究というよりは、むしろ強く「歴史哲学」的な試行にほかならない。「マルクスは原初的共同体の諸類型をつくり、人類史の歴史哲学的展望を用意した」(p.149) ののである。

資本制に先行する諸形態をめぐるマルクスの思考を、今村が再整理する手ぎわも、それじしん興味ぶかいものであるが、ここではその細部の検討はおく。マルクスの商品論、限定していえばいわゆる価値形態論のうちに、「歴史的時間」の痕跡を読みとく、今村の読解をとり上げておきたい。『資本論』解釈としては、今村『入門』がふくむ、おそらくはもっともポレミカルな論点にほかならない。今村の総括的な認定を、まずは引く。

形態論的展開は貨幣の発生論とよばれるが、われわれの観点からいえば、形態論は現実存在する貨幣の内的構成の分析である。それは貨幣の構造分析ともいえる。最後のもっとも展開した形態（第四形態）は、それ以前のすべての形態を前提しつつ（suppositio）それらを含んでいる（implicatio）。これをヘーゲル用語でいえば止揚（Aufheben）になる。この用語でいえば、第四形態（貨幣形態）はそれ以前のすべての諸形態を（それらのすべての変異体を含めて）、語のすべての意味でアウフヘーベンしている。そこに歴史的時間が顔を出している。(p.191)

今村は検討に先だって、簡略化したかたちで、価値形態論の図式を呈示している (p.190)。ここでは念のため、『資本論』二版のテキストにそくして、四つの価値形態を挙げておく。

##### A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態（第一形態）

$x$  量の商品 A =  $y$  量の商品 B (20 エレのリンネル = 1 着の上着)

##### B 全体的な、または展開された価値形態（第二形態）

$z$  量の商品 A =  $u$  量の商品 B または =  $v$  量の商品 C または =  $w$  量の商品 D または =  $x$  量の商品 E または = etc. (20 エレのリンネル = 1 着の上着 または 10 ポンドの茶 または = 40 ポンドのコーヒー または = 1 クォーターの小麦 または = 2 オンスの金 または 1 / 2 トンの鉄 または = その他)

C 一般的価値形態（第三形態）

1 着の上着	=	}	20 エレのリンネル
10 ポンドの茶	=		
40 ポンドのコーヒー	=		
1 クォーターの小麦	=		
2 オンスの金	=		
1 / 2 トンの鉄	=		
x 量の商品 A	=		
等々の商品	=		

D 貨幣形態（第四形態）

20 エレのリンネル	=	}	2 オンスの金
1 着の上着	=		
10 ポンドの茶	=		
40 ポンドのコーヒー	=		
1 クォーターの小麦	=		
2 オンスの金	=		
1 / 2 トンの鉄	=		
x 量の商品 A	=		

今村によれば、これら四つの形態は一方では「純粹に形式化された「論理的」価値形態」である。第一形態から第四形態にいたる価値形態のいっさいは、しかし他方「同時にかつて実在した社会形態（人類の歴史的経験）を、特殊には交易様式の歴史的形態を「指示する」」（p.192）。それぞれの形態にかんする今村の認定をかんとんにたどっておく。

まず第一形態は、一面では「極度の抽象」であって、「この形態に照応する歴史的形態がそれ自体単独で登場するのは例外的ケース」である。にもかかわらずそれは他面、「ありふれた現象」でもあって、「無数の交易の場面のスナップショットのごときもの」としては「現実を構成するきわめて具体的な要素」にほかならない。第一形態はいわば「物々交換」を示しているのであるけれども、交換の主体が個人ではなく共同体であると考えれば、「にわかに歴史的現実に近づく」。「それはアルカイックな共同体と共同体の交易である。その意味で第一形態は、人類学がいう贈与の互酬交易の基本的形式である」（p.193f）。

第二形態についてはどうか。今村によれば、それは「地球上のいたるところで見られた（いまも見られる）ローカル・マーケット（局地的市場）を指示する」ものにほかならない。



歴史的に言えば、たとえば「複数の局地的市場が相対的に孤立しながら農村共同体の周縁に登場した状態、あるいは農村共同体の外部で都市的空間を形成しつつある状態、そしてついには農村の内部に浸透しつつある状態、等々」に対応する。

この第二形態の特色は、それが「個別的」なことである。個別的な交換において偶然的に「価値」が成立したとしても、その価値は「一般性をもたない」。あるいは「市場価格」がなお成立していない。市場価格は「ナショナルマーケット」の存在を前提するからである。第二形態は、だから、他方ではむしろ「冒険的な賭け事に近い」「遠隔地交易」がまとうすがたでもある。「局地的市場にも遠隔地交易にも、一般的等価が存在しない」のだ。その意味で「統一性の欠如」こそが「第二形態の根本特質」なのである（以上、pp.195-197）。

第三形態は、この一般的等価をふくむ形態である。「この形態はかぎりなく貨幣形態に近づくが、けっして貨幣形態ではない」。第三形態と第四形態の間には、形態論的類似をこえて、飛び越せない溝がある。この溝こそが歴史的含蓄である」（p.198）。今村のこの認識に、まずは注意しておく必要がある。テキストを引く。

無数の商品取引を唯一の財貨Xによって表現するというとき、Xの位置に立つ財貨は何でもよい（任意である）。歴史的経験においては、任意のXの位置という空白の場所に、たとえば、奴隷という人間、家畜、その他何でも入れることができる。要するに、その時々で「希少」だと評価される任意の物品がXの位置を占めるにすぎない。

これが指示する歴史的経験はあまたある。西洋の古代ギリシアや古代ローマあるいは中世社会において、アジアのすべての地域において、第三形態的交易様式が実在した。危機的な状況があるときには、現在の諸社会においても第三形態が登場することがある。日本の敗戦直後の経済では、第一形態から第三形態までのすべての形態が指示する交易様式をひとは同時に経験した（物々交換から局所的に流通するタバコ「貨幣」まで、そして賄賂もまた！）。それと同様に、近代以前の人類は、第一、第二、第三の価値形態に凝縮される交易経験を同時に実践していた。（p.198f.）

むしろ今村自身の歴史を見る目と、現実をとらえる視点とが確認される一節であるかもしれない。ともあれ今村の読みによれば、こうした「貨幣の形態分析は、貨幣の「オントロジー（存在論的）」な発生史であり、同時に歴史哲学的な意味をもつ」。第四形態、つまり「貨幣は、交易様式に関わるかぎり、人類の歴史のカンヅメ」なのである（p.199f.）。貨幣という価値形態のうちに、人類史と共同体の歴史の総体が痕跡としてあらわれている。

価値形態論をめぐる今村のこうした読解に異をとなえることは、ある意味ではたやすい。たとえば吉田憲夫が今村仁司を追悼する、故人への敬意に満ちた一文で、とはいえ率直に問題を提起しているように、マルクスは第一形態において、歴史的に実在した（であろう）よ

## 最後のマルクス

うな偶然的で個別的な交易を問題としたのではなく、むしろ安定的で反復的な交換過程を念頭においていると見る余地もあるからである（『情況』2007年7・8月号）。けれども他方、おなじ追悼文で吉田が確認しているように、今村が「第三形態と第四形態の間には、形態論的類似をこえて、飛び越せない溝がある。この溝こそが歴史的含蓄である」ととらえていることは、読解の差異を超えて、かんぜんに正当な主張であるように思われる。今村による、価値形態論をめぐる歴史哲学的解説は、おそらくこの一点にかかっている。

最後に、この「歴史哲学的解説」の、さらに前提となる議論にさかのぼっておきたい。今村／マルクスの時間論、歴史的時間論がそれである。

## 5. 時間の哲学、あるいはマルクス・アルチュセール・今村仁司

今村仁司『入門』が、その序章においてマルクス解釈の類型を整理し、第一類型としては「経済中心史観」、第二類型には「実践的主体論」、第三類型のかたちで「構造論（関係論）」を取りだしていることについては、この稿の第1節であらかじめ見ておいた。今村が第三類型の典型と考えているものは、アルチュセールのマルクス解釈であり、そこから今村が学び、その影響が継続している論点のひとつは、歴史の概念であり、また歴史的時間の概念であろうことも、その節の末尾ですでにふれておいたとおりである。

構造の科学として『資本論』を読解しようとするアルチュセールのマルクス解釈のこころみをまとめたあとで、今村はつぎのように説いていた。ふたたび「序章」から引用する。

ところで、もう一つの問題がある。それが歴史の概念である。これまた過去のマルクス主義は一度も概念的にも、理論的にも問わなかった。人間の社会も個人も現実のなかで生きるかぎり、必ず時間のなかで、あるいはむしろ時間として実在し、時間的に動く。しかし社会のなかの時間は、自然科学でいう可逆的時間とはまったく異なる。社会的、歴史的時間は、後戻りできない時間である。人間の行為はどの種類のものであっても、与えられた状況をまったく新しい姿に変える。この変換行為のシリーズが不可逆の歴史的時間を生み出す。

一つの行為は、所与の状況を決定的に変更してしまう。だからこそ、人間の行為は「出来事」を産出し、その出来事によって人間の主体の側でも後戻りできない変化を被ることになる。社会的・歴史的時間は人間の行為に深く根ざしており、この行為が眼前の事情を変形し、前にはなかった事件をつくりだすから、社会のなかの出来事は「歴史的な」出来事になる。（p.51f.）

今村がマルクスとアルチュセールから学んだ、時間論の骨格である。とはいえそれは、明

示的にはマルクスのものでアルチュセールのマルクス解釈に由来するものでもない、社会哲学者・今村仁司そのひとの時間論のスケッチでもある。この稿で読みとこうとしてきた一書、今村の『マルクス入門』は、そしてある意味で、時間論そのものを主題とする作品でもあったように思われる。すくなくともそう読んでおく余地があると思われる。

マルクスによれば、資本制的生産様式が支配的な社会は、たんに「ひとつの時代」であるばかりではない。それは「そのなかに先行するすべての時代の精髓を、したがって人類史の全体を含む」。そうであるなら、「その「含む（包摂）」とはどういうことなのであろうか」。第四章、「歴史的時間の概念——ヘーゲルとマルクス」と題された一章の冒頭で、今村はそう問題を提起する。つづく部分から引用しておく。

過去の出来事は、生まれては消えることの繰り返しなのだろうか。ひとは過去の出来事を永遠に消え去ったものとみなし、ときに思い出しながら忘れ去る。ひとが過去を思い出すとき、過去のものは永遠に消滅してしまはしないものと当然のように前提している。歴史の研究は永遠に決定的に消滅した事物を、かつてあったように再現することだというのが、かつてあったままに知ることなどどうしてできるのだろうか。資料があれば自動的にそうできるのだろうか。むしろ反対に、学者もふつうのひとでも現在の自分の考えや見方を過去に投影しているのではないだろうか。(p.162)

ここには、古来の時間論そのものをめぐる難問への問いかけがある。同時にまた、歴史哲学の根本問題への問いかけがあるといってよい。本書で与えられている回答は、マルクス論というよりも、むしろ今村哲学の核心そのものである。かんたんに確認しておく。

今村が考えるところでは、およそ「歴史のなかで生きる人間の行為なしには時間はない」(p.164)。なぜだろうか。おそらくは、なにか決定的に新たなものの到来を欠いては時間は存在せず、人間の行為こそが決定的に新しいなにごとかを世界のうちにもたらずからである。今村の思考のすじみちは、おおむね以下のとおりである。

人間はたんに「時間のなかに」存在するのではない。「人間が時間それ自体である」。人間は行為するさいに、「特定の与件（所与）」にはたらきかけて、所与を変形する。それは「前には実在しなかった新しい何かを生産する」ことにほかならない。この新しいなにかを生産する行為それ自身が「いわば時間を「うみだす」のであり、あるいは時間そのものである」。——ひとが行為するとき、世界は変容する。「この状態の変化をひとが知る（自覚する）ことが時間」なのである。行為なくして変化の意識は生じない。そのかぎりでは「行為と変化の意識は一体である」(p.165)。

人間の行為の基底には、人間の「欲望」がある。「人間とは欲望そのものである」。その意味では欲望こそが、時間を産出するといってもよい。欲望の各次元と、その充足・制御の各

水準にふれたのちに、今村は、「欲望と行為があるかぎり、人間はたんに生きるためにだけでも環境を変更する」と言う。環境という所与の変容が、新たななにごとかを到来させ、「人間がそれを認識し記憶し語るとき、歴史の時間が流れる」。「なにかをめざして行為するとき、人間は対象と自分の行動について自覚し言葉を発する。そして自分の内部と外部について物語（語られる歴史）を紡ぎ出す。その意味で人間は時間的であり、それ以上に時間そのものである」（pp.165-167）。今村による「歴史的時間」論の、おそらくは核心にかかわるテキストを引用しておく。

時間的存在であり、時間であるところの人間が運動するそのつど、前になかったものという意味で「新しい」事物が生まれるが、この「新しさ」が重要である。ひとつの「新しい」事物がこの世界に登場するたびに、世界はたとえ微少なりといえども相貌を変えたのである。世界の相貌の変化は、出来事として定義できる。出来事は世界の変貌である。人間はこの変貌に驚く、あるいはそれによって強い印象をうける。出来事は人間精神のなかにその刺激の刻印を残す。この強い印象あるいは記憶に残る刻印のゆえに、人間は自分の行為の結果を世界状態の変動としてみなし、それに「ついて」語る意欲を感じる。この語りは、出来事について筋道をつける歴史、知としての歴史である。〔中略〕

こうして、人間が時間的であり、時間であるからこそ、世界は変貌し、二重の意味での歴史が生じる。人間的時間は必ず歴史的時間なのである。歴史的時間はずねに現実の人間と一体であり、その意味で具体的である。たしかに時間はまずは意識内の時間ではある。しかし意識された時間（概念された時間）は人間の行為を通して「現実中存在する」。（p.167f.）

これは、緻密な哲学的思考に裏うちされた、一箇の時間論の素描である。引用したテキストには、しかしそれ以上のなにごとかがふくまれている。それはおそらく、今村が終生てばなすことがなかった、ある希望のかたちであるように思われる。今村時間論は、思うに、到来する未来に希望を託しつづける思考の傾向と一体のものなのであった。魅力にあふれるその歴史的時間論を本格的に展開する時は、今村仁司そのひとには与えられなかった。課題は、つづく者たちに遺されていることになる。

\*

『入門』が出版されてほどなく、筑摩書房の旧知の編集者を介して、ぜひ読んでコメントしてほしいとの伝言とともに、著書を寄贈された。すぐに礼状だけは出したけれども、内容的な議論を今村と交わす機会は訪れなかった。この稿は、遅きに逸した、今村仁司への応答である。

今村仁司と最初に会ったのは、1978年の暮れのことであった。ヘーゲルとヘーゲル左派、そしてマルクスに関心を寄せる者たちが集まる研究会の席上のことである。以来、80年代の前半、廣松渉を中心とする社会思想史研究会という場で、今村に多くを学び、いわば「オジキ」格であった今村に親炙した。研究会の席でふいに哄笑する今村、酒の席で満面に笑みを浮かべる今村、朝まで飲んだそのあとで、なお議論を繰り返してひろげ、とつぜん激昂する今村、さまざまな場面での今村仁司のすがたを、いまでも忘れがたい。

やがて今村は研究会にはめったにあらわれなくなり、90年には私自身が東京をはなれる。会う機会もほぼ途絶えて10年もの歳月が流れ、レヴィナスをめぐる展開した、貧しい思考の成果を二冊の小著にまとめたとき、今村仁司はそのそれぞれについて、新聞と雑誌に懇切丁寧な書評を書いてくれた。今村が、いわゆる社交辞令とは徹底して無縁な人間であっただけに、そのことばによって強く励まされたことを、いまはむしろある種の痛みとともに思い出す。

その後、親しい友人、麻生博之が東京経済大学に職を得たことをもきっかけとして、今村といくどか顔を合わせる機会があり、変わらぬ温容に接した。今村の決定的な不在は、この国の学と思考の展開にとって、埋めがたい損失である。埋めがたいその欠落を、後進の者たちがやはり埋めてゆかなければならないのだろう。いまはしかし、喪われたものの大きさに、ただ立ちつくすばかりである。